

# 「3・11いわて教会ネットワーク」ニュース

Vol.23 2014/2/16

背後にある皆さまのお祈りとご支援に心から感謝します。いっぽいっぽ山田のスタッフとして2年以上に渡りご奉仕下さった本間英隆・早苗夫妻が働きを終えて故郷の北海道に戻られました。今回は本間早苗さんに今までの働きを振り返って記事を書いていただきました。一方、宮古・田老地区で仕え続ける永田道生スタッフは、支援活動の葛藤の中で与えられた恵みについて記してくれました。

## 神様の始められたお働き 本間 早苗 元いっぽいっぽ山田・コーディネーター



朝のいっぽいっぽ。常連さんが集まっています。

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。

ピリピ1：6

救い主イエス様のお名前を賛美します。2011年10月、住居が見つからないまま宮古に着任してから2年4か月。荷物といっしょに多くの恵みを携えて今、私たちは北海道に向かうフェリーの中です。

尋常ではない早さで変化していく働きの中を、ただただ駆けつけて来たような感があります。いつも先のことがわからない手探り状態の日々、問題もたびたびおきました。このような毎日に否定的な感情はさほどなく、むしろ、いつも主にある期待感がありました。感謝です。

2012年6月に、交流ぶらざ いっぽいっぽ・山田（以下、いっぽ）がオープンして以来、日を追うごとに、来られる方々との距離が近くなっていることを実感しています。

仮設でのカフェに来られる方は、高齢の女性が多く、メンバーが固定している傾向がありました。

いっぽを利用する方々の多様さにはびっくりします。赤ちゃん連れのお母さん、学校帰りの小学生、部活帰りの中・高校生、パート帰りのおばさんたち、元漁師、現役漁師の男性たち、サークル帰りの女性のみなさん、町内会の役員のみなさん。様々な方が、同じ空間にいっしょにいて、思い思いに、そして、それとなく互いに配慮をしながら時間を過ごしています。

日常の回復の遅さに不安や苛立ちを感じながらも、忍耐している様子が見えます。誰かといっしょにいるみなさんは楽しそうではありますが、時間の経過と共に、私たちスタッフともっと個人的な深い話をしたい方もいることがわかってきました。

生活のすべてが流され、燃やされてしまった被災者、という理解のもとで私たちは被災の故の苦しみ、痛みを心に寄せてきましたが、みなさんからは、すでに持っていた震災以前からの生きづらさや問題を聞くことも多くなっています。

抱えている問題の解決をスタッフに要求してくるわけではありません。とにかくこちらが聞き続けていると、相手は自ずと自分自身が答えを持



ある日のいっぽいっぽ。  
子どもたちの自転車がいっぱいです。

っていることに気づき始めます。

でも、それをどう実践していくべきか確信が持てないのです。全部を自分の力と思いでしなければならぬから、結局は行き詰ってしまうのです。誰かからの共感、励ましが必要とされます。

私たちが岩手にいる意味は、文字通り、支援のためですが、たくさんの支援団体がある中で、クリスチャンが支援をする意味はどこにあるのでしょうか。

人がすること、人がしてもらおうことの限界を思っています。その限界を超えた先にある、無くなることのない希望へのとびら、神様との関係を回復することによって得られるたましいの救いの道を提示することはクリスチャンの特権であることを、ここに来て強く思っています。責任という言い方もできるかもしれませんが、むしろそのことができるのは恵みと思うのです。

いっぽに置いてある本のタイトル「いのちより大切なもの」を見て、思いを巡らした上で、私たちに問いかけてくる方がいます。掛けてある絵や写真に印刷されているみことばを読み、いいことばだね、と言う方がいます。愛するものよ、と語りかけるみことばを声を出して読んでいる小学生に、誰が言っているかわかる？誰のことを愛していると言っているかわかる？と問いかけた後、〇〇ちゃんは神様に愛されているんだよ、と伝えることができます。

トイレに掛けてある「あしあと」を読んだことがきっかけで、聖書を読むようになった方がいます。いただいたピアノをスタッフが弾き、みなさんと賛美する時、歌詞の意味を説明することで聖書の神様について伝えることができます。クリスマスにイエス様のご降誕をお伝えすると、クリスマスの本当の意味を初めて知ってよかった、と喜ぶ人がいます。日曜日はどこの教会に行くの？礼拝って何をするのか？と聞かれますから、ていねいにお答えします。お誘いした方が、礼拝に出席されることもあります。

死にたい、と言って自分の状況を切々と訴える男性、私なんかいない方がいい、と言って泣きじゃくる女性、震災でなぜ私が生き残ったのか、と生きている自分を責めている方々。人間的な慰めや励ましは意味がないどころか、さらに状態を悪くすることもありうることを思う時、私たちクリスチャンは、何を言うことができるでしょう。そんな時私たちは、聖書にはこう書いてあります、神様は私たちにこう言っています、と伝えることにしています。会話の締めくくりには、心こめて

お祈りさせていただくこともあります。静かに静かに、みことばの種が蒔かれています。

神様や聖書について知りたい方にとって、支援の場であるいっぽの中では、他の利用者に対しての遠慮があることも事実です。真理を求め、救いを求める方が何にも煩わされることなく、その目的のために訪れることができる場所が必要。いっぽという入口を通った方に、さらにその先に進むべき道があることをお知らせしたい。教会がほしい。時を経て、支援を継続しながらそのことを祈るクリスチャンが増えてきています。

閉じられた社会で、家庭や地域の文化的、歴史的背景から、世の中はこういうものだとか教えられ続けてきた方々に、違った価値観があることをクリスチャンの存在を通してお伝えできたらと思います。選びようがなかった人生に、自らが選び取ることのできる他の可能性があることをぜひお知らせしたいのです。国の内外から、小さな光が岩手の沿岸に集められ続けていることの意味を深く思いながら、これからもみんなできいっしょに、主のみこころにかなった祈りを積んでいきたいと願います。

私たちのために、ここでの働きのために、祈りや具体的な行いを通して、また、その存在をもって励まし続けてくださる教職者の諸先生、同労の兄弟姉妹に感謝します。

神様に栄光がありますように。

**しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がいなくて、どうして聞くことができるでしょう。ローマ10：14**



クリスマス・イブ礼拝 in いっぽいっぽ

## このために岩手に来た！と思える出来事 永田 道生 宮古・田老地区スタッフ

震災支援で楽しいなと思うことが25% 話を聞いて重いなと思うことが25% 誰かのためになれたかなともやもやすることが49% あ、この為に岩手にきたのかと思う事が1% 今日はその1%を感じる事ができた一日に。その事は後で書く事にして・・・。

「続けていく」という事の難しさをひしひしと感じる今日この頃。「寄り添いつづける」という事を念頭に続けてきた被災地支援。現地の必要に耳を傾け、大きな事はできないけれども、出来る限りで応えていく。それを続けた二年半。けれども寄り添いつづける事は目には見えないし、助成金を申請しても、何をやっているかわからないと却下されてしまう。世の中に理解される「支援の仕方」と現地の人が必要としている「支援」に歪みがあるようにも思えてしまう。もしくはそれを私がうまくブリッジとなるように発信できていないだけかもしれないが。

人に見せる為の被災地支援ではない。けれどもアピールしなければ理解は得られない。見栄えの良い支援をすればよいのか？ こんな建物を作りました、こんなものも残しました、話をただ聞くなんてとんでもない、これもしました、あれもしてます、私達はこんな事をしてますよと見える形というのが本当に良いのだろうか。

団体の好感度をあげる事が被災地支援だろうか？ 現地の必要と折り合いをつけ、バランスを保つのが策なのか？ それでは本来の被災地支援という趣旨から完全に逸脱してしまうのでは、しかし甘っちょろい事をいっけては続けてはいけない。

そんな個人ではどうする事も出来ない事をもやもやと考えていた矢先、仮設でのイベントが終わり、みんなが談話室から家へ戻っていく時に、一人の女性と目が合った。80代ぐらいだろうか。イベントがある度に会っていたのでお互い顔は知っていた。その人は立ち止まり、私の方に歩いてこられ、片方の手袋を外し、冷たい手で「ありがとう」と言いながら手を握ってきた。

「最近どうですか？」とお尋ねすると、その女性は震えた声で、「震災後から声がでなくなりました。けれどおかげさまで、あなた方が来続けてくれたから、今はこの通り声がでるようになったのよ」話しが終わるまで、その方はずっと私の手を握られていた。今日、このタイミングで彼女がかけてくれたこの言葉、まさに、この為に岩手にきたのかなと思える1%の出来事だった。同時に、色んな迷いが消え去った。どんな都合があろうとも、優先順位が被災地の人から支援団体になる時に、もうそこまでしてその団体を存続させる意味はないのだと。こんなにやってもしわ寄せかい・・・と悶々してた今の自分に必要な彼女の言葉でした。(2013/12/19)



仮設で餅つきをしました。

### 3.11いわて教会ネットワークNEWS



#### キャサリンさんのCDが発売されました。

3.11 いわて教会ネットワークのスタッフでハーピストのキャサリン・ポーターさんのCD「目を上げて」が発売されました。被災地の人々との関わりを通して生まれた慰めに満ちた一枚です。購入を希望される方はホームページを通し事務局までお申し込み下さい。

CD「目を上げて」 キャサリン・ポーター  
(収録曲) アメージング・グレイス、ふるさと、  
主の祈り、など。 税込 ¥2,100



## 大船渡聖書バプテスト教会でキャンドルサービスが開催

近藤愛哉（大船渡聖書バプテスト教会顧問牧師）

大船渡市での働きのための祈り、そして諸々の支援に感謝します。2011年の12月から本格的に始動した大船渡での支援活動ですが、それから2年、現地スタッフの入れ替わりにも関わらず、その働きが着実に進められて来たことに、大船渡という地に対する主の憐みとご計画を見る思いがします。

昨年12月24日には、大船渡聖書バプテスト教会においてキャンドルサービスが行われました。大塩梨奈姉、ウィットワ夫妻、ベイ夫妻の各スタッフがこの日のために祈り備え、教会のメンバーも合流して迎えた当日でしたが、事前に案内はしたものの、実際にどれだけの方が足を運んで下さるのかとの不安もありました。しかし、ふたを開けてみれば支援活動を通して知り合った方々とその家族達、小中学生、地域の方々、仮設住宅の支援員、ボランティアで滞在中の清水康先生（聖契教団）や杉浦先生御一家（大槌ジョイフルハウス）も加わって下さり、会堂は30名強の人で溢れたのです。共に食し、歌い、笑い、クリスマスのメッセージに耳を傾け・・・、その光景はこの二年間、丁寧に積み重ねられて来た地域での証しの一つの実のようにも思われました。

教会員の方と話したところ、大船渡聖書バプテスト教会では、少なくともこの20年くらいの間に、このような形でクリスマスに集会が持たれたことはなかったということです。震災時には津波によって会堂内部が破壊され、無牧となり、教会員も三人となり、将来を描くことも難しく思われた大船渡聖書バプテスト教会ですが、「教会の働き」としての支援活動を通して主に献身するネットワークのスタッフ達の存在によって大きな励ましを受け続けて来ました。喜びと共にささげられる毎週の礼拝、毎月の祈禱会に参加をすれば、主にこそ唯一の希望があることを実感出来ます。

どうぞ、私たちの祈りに皆様の祈りをも重ねて下さい。ますます教会の働きとしての活動を通して、イエス・キリストにある希望が証しされて行きますように。教会が、灯台が船の行先を示すように、大船渡の地に福音の光を照らし続けることが出来ますように。

## 今年も3・11集会を開催します。

「3・11集会」を今年は3月9日（日）の午後3時半より、北上聖書バプテスト教会を会場に開催します。震災後3年の間にこの地でなされたみわざを覚え、与えられた課題をともに確認する機会です。ぜひ覚えてお集まり下さい（3月11日の開催ではありませんのでご注意ください）。

## スタッフの動向

本間英隆・早苗夫妻とクリスティーナ・ジョーンズさんが岩手での働きを終えて、新しい出発を果たしました。今までの忠実なご奉仕に感謝します。一方、いっぽいっぽ山田の新しいスタッフとしてエイリン・ガレス&裕子夫妻が着任しました。感謝します。

## 12～1月に支援に駆けつけて下さった教会・団体

合同教会、こひつじキリスト教会、戸倉キリスト教会、シンガポールチーム、  
ユニテッド・プロジェクト、ユース・ウィズ・ア・ミッション、インパクトチーム、  
盛岡聖書バプテスト教会、盛岡みなみ教会、北上聖書バプテスト教会、水沢聖書バプテスト教会、  
宮古コミュニティ・チャーチ、陸前高田キリスト教会、気仙沼第一聖書バプテスト教会  
（その他、個人で駆けつけご奉仕下さった方々が多くおられます。）